

と」をよしとし、それに「近代(科学)的であること」を對置するような、二項対立図式である。

ホメオパシー以外にも、代替療法や健康法はしばしば、何が「善いこと」で何がそうでないのかという、生活もしくは人生全体に関する言説(単に物理的身体を良好に維持するというだけではなく)の中にある。広く普及したそうした二項対立——しばしばそれは、善悪二元論に近いものになる——を共有する人々のなかで、ホメオパシーは「近代科学的でない」つまり「自然」のものである」という点を「よいもの」と認められて普及しつつあった。ホメオパシーに対する批判には、ホメオパシーそのものが「荒唐無稽」だという指摘と同時に、この広く浸透した二項対立図式によって、人々が(故なく)通常(近代)医療を避けることにつながりかねないことへの危機感が見られるのである。

しかし、代替療法によって起こる問題に対応するためには、学術会議談話で目指されたような、「科学による客観的事実関係の確認」と「啓蒙」だけでは限界があるだろう。代替療法は、「治った」という個々の治療者・利用者の主観的経験が共通の「現実」として組織されるプロセスと、その解釈を枠付ける社会的文脈によってこそ成り立つからだ。これに対し、宗教(社会学)における代替療法研究の蓄積は、そうした主観的経験が「現実」となっていくプロセスを理解するのに重要な視点を提供する。今後もしつその展開が必要になるだろう。

宗教者としてのエンゲルハート

——宗教的生命倫理という試み——

池澤 優

本発表は、トリストラム・エンゲルハートの『キリスト教生命倫理の基礎づけ』(*The Foundation of Christian Bioethics*, 2000)を取り上げ、生命倫理言説と宗教の関係を考える。エンゲルハートは、理性的な思考能力を有する人格の自己決定に最大の価値とするパーソン論の確立に寄与したことで知られるが、本書では一転して「伝統的キリスト教」に基づく宗教的生命倫理を提起している。その背景には、理性と人格を価値とする近代の思考法では内容のある倫理性は獲得できないとする歴史認識が存在する。

中世のキリスト教は道德の単一性を保証していたが、宗教改革による分裂から、理性により万人が共有できる道德性を獲得することを目指す啓蒙主義が生まれた。啓蒙主義は超越的な実在を把握することを放棄し、価値の重点を内在的な主体(人間)に移して、理性を有する人格の尊重を最大の道德であるとした(カント)。それはカトリックのスコラ哲学から信仰を除き去った、世俗的な宗教であったと言える。しかし、人格の尊重という定言命法が実質的な内容を獲得するためには、先ず基盤となる価値観が存在する必要があるであって、啓蒙主義も道德の複数性を乗り越えることはできなかった。そこから、自由な社会の枠組みの中で、特定の道德を奉じる複数の共同体が並

存する「自由至上主義的多元社会」の構図が生じる(ヘーゲル)。その中では異なる道德観を持つ倫理的異人たちが同意によって協働するが、内容のある道德を客観的真理として獲得することはできない。のみならず、当初は同意が倫理的異人たちの協働を可能にする単なる手続きだけであつたとしても、やがて同意を与える自律と自由のみが価値とされることで、人間の自然のあり方を克服して、自己(欲望を含め)を実現することが正しいとされるに至る(自由な多元社会)。

この状況に対してエンゲルハートが試みるのは、生きること超越的、人格的な意義があることを「選択」することに基づく倫理(生命倫理)の構築である。伝統的キリスト教は超越的にして人格的な神と合一するという純粹体験を志向し、神により与えられた「聖霊」により人間の心は神を知覚することはできると考えた。原罪によって世界は破滅的なものになっており、人間のあり方(自然)が全て正しいものではないが、良心(聖霊)により神と神の法則を志向することができ、それが人間の本来の「自然」である。そのように知覚された神の法則から道德性は獲得できるのであり、それは価値を自己ではなく他者(神と他の人格)に置いて応答を求めていくことであり、そのためには禁欲と悔い改めの生活と、典礼に基づく共同体が必要である。言い換えれば、エンゲルハートは人間の良心を神の与えたものとするので、道德感情はそのままで規範性を有するとしたのである。

エンゲルハートが構想した伝統的キリスト教生命倫理は、人間が生きることの意義は相互に応答する存在という意味での

「人格」にあり、そのような存在意義を選択することで、神との合一を志向する人間のあり方が設定され、そこから良心(道德感情)を神が与えたものとして肯定するという論理であると言える。それは近代がキリスト教から剥ぎ取ってしまったものに注目して再構成した倫理であるが、最初の段階に「選択」が設定されていることが示すように、「選択」を共有しない者にとつては説得性を持たない、信仰共同体の内部に閉じられた倫理である。それも一つの方法ではあるが、より開かれた宗教的生命倫理を追究する余地は、まだ残っていると思われる。エンゲルハートが拒絶した、相対化し弱められた宗教性(「スピリチュアリテイ」)を積極的に活用することは、考えるに値する選択肢であるように思われる。

仏教の生命観と代理母

金 永 晃

仏教の生命観は「阿頼耶識」における輪廻の途上で胎児が生まれる過程を説明してくれる。この胎児説とは、衆生が業力(karma)によって、三界六道を輪廻するという輪廻説によるものであるが、前生から現世において胎児が生まれる過程を説明するものである。胎児の出生説について『増一阿含経』によれば、生の中間原理である中有は唯識学の阿頼耶識の生命観に影響を与える。唯識学では、中有の概念を識の転換として阿頼耶識を立てる。一切衆生は、死後前世の業が阿頼耶識に貯蔵さ